

かがり火と 岐阜提灯と川風と

〔長良川の新しい風景を岐阜の観光資源に〕

当所では、去る10月4日、岐阜提灯を手に川岸の「長良川プロムナード」から

鵜飼を自由に楽しめるスタイルを提案する社会実験イベント

岐阜商工会議所創立130周年記念事業

「長良川ブランド かわべの宵」

を開催しました。



かがり火と岐阜提灯と川風と

～長良川の新しい風景を岐阜の観光資源に～

「長良川プロムナード」は、長良川鵜飼が行われる清流長良川の右岸に位置し、正面には雄大な金華山を望む河畔の遊歩道です。この遊歩道は、岐阜市が平成11年に策定した長良川プロムナード計画に基づき、平成17年に市民や来訪者が安全で、快適に散策できる空間（遊歩道）として整備されたものです。その後、長良川うかいミュージアムのオープンや鵜飼屋地区が国の重要な文化的景観として指定を受ける中で、長良川プロムナードの安全性をさらに高め、良好な景観の維持保全に配慮した、道づくりを目指し、平成29年に再整備が行われました。

この長良川プロムナードは、広く市民や来訪者に利用されるよう、特に鵜飼開催時には河畔から安全かつ快適に観覧できる場として提供されてきましたが、その成果は周知を含め、十分とはいえない状況にあります。

また近年、日本各地に豪雨などが多発し、長良川においても増水等による鵜飼中止日数の増加等の影響が生じています。加えて、今般のコロナ禍における新たな生活様式に対応した観覧方法が求められるなど、新たな長良川鵜飼のあり方も模索していく必要があるといえます。

そこで当所では、こうした課題に対応すべく、本年創立130周年記念事業のひとつとして、10月4日に「長良川プロムナード」を活用した、船による鵜飼観覧以外の新しい鵜飼の楽しみ方・魅せ方を提案し、それを映像化するイベントとして、「長良川ブランドかわべの宵」を開催。長良川の鵜飼観覧を岐阜市の観光資源の軸として永続的なものとするため、観覧船から近くで迫力ある鵜飼を観覧する方法と、長良川プロムナードなどの川岸から自由に情緒ある観

覧をする方法の2つの楽しみ方があることを提案することで、岐阜市が進める観光振興に資する取り組みとして展開するものです。

また、コロナ禍における新たな鵜飼観覧のあり方を検討するとともに、今後のイベントにつなげていくものでもあります。

現在、国土交通省では、豊かな自然などの観光資源としての価値を有する貴重な公共空間である河川敷地において、治水上、利水上又は河川環境上の支障が生じないよう配慮しつつ、快適でにぎわいのある水辺空間の創出を推進しています。

そのなかで、日本の水辺の新しい活用の可能性を創造していこうという「ミズベリング」という市民企業、行政が三位一体となった活動が全国各地で高まっています。

当所は、これらの機運とも相ま

って、今回の「長良川ブランドかわべの宵」を契機に、将来的には、長良川プロムナードに移動型のキッチンカーなどを配備して食と鵜飼をテーマとしたイベントとして展開し、鵜飼及び岐阜市観光の魅力度向上へとつなげていきたいと考えます。

さらに長良川プロムナードを中心に、四季折々の長良川を楽しむイベントを「長良川ブランド」として定期的に開催することで、長良川プロムナード及び河畔周辺が末永く岐阜市民に愛される憩いの場・賑わい拠点となり、ひいては活力ある岐阜のまちづくりに貢献できることを切望します。

長良川プロムナード



プロムナード入口

← 長良橋



長良橋入口

← 川原町



鵜飼船着場



午後5時15分～川原町広場を、岐阜提灯を手に順次出発。長良橋やプロムナードを歩く姿を撮影しました。



鵜飼観覧船乗船客数は、NHKの大河ドラマ「国盗り物語」が放映された1973年の33万7337人をピークに、近年は10万～11万人台で推移しています。豪雨被害で過去最多の42日間運休した2018年に初めて10万人を割り込む7万6330人となり、昨年9月1178人ととどまりました。

今年は新型コロナウイルス感染拡大の影響で、観覧船の運航開始が例年より1か月以上遅れ、また密を避けるため観覧船の定員を半減し、船内での飲食を禁止する対応をとったこともあり、乗船客数は統計が残る1965年以降過去最低の1万5310人ととどまりました。これは、昨年と比べても八割以上の大幅減。これまで最低だった2018年の7万6310人を大きく下回りました。



Social Distance

プロモーションビデオの撮影
岐阜という文化的な価値とソーシャルディスタンスを保つためのツールとして、岐阜の特産品「岐阜提灯」を手に、川岸を歩きました。



鵜飼の家 すぎ山 社長 杉山貴紀 氏

鵜飼は、多くの岐阜の皆さんの心の中にさまざまな形で根付いています。鵜飼という漁の姿を変わらない形で継承していき、その上で、どう守っていくか。そこには、「見せ方」という工夫があるうかと思えます。

船からの観覧には限界があります。今回のイベントは、提灯のあかりを手に歩き、あかりとともに観覧するという、日本らしい「灯の文化」を、長良川に幻想的に映し出しました。ここには、長良川鵜飼を楽しむ新しい工夫として、かなりの可能性があるのではないかと思います。また、このようなことを今後も繋いでいく

ぎふ長良川鵜飼鵜匠 代表 杉山雅彦 氏

集うことが難しくなりました。このように岐阜提灯でソーシャルディスタンスをとりながら川岸から鵜飼観覧という新しい楽しみ方の提案はともよかったです。鵜匠の間でも、こういう形があってもいいかと話しています。船から観覧しているお客様たちも、岐阜提灯のやわらかいあかりに、また違った風情を楽しめたのではないのでしょうか。

長良川の鵜飼は、多くの皆さんに声や支援をいただきながら行っています。鵜飼をじっくりと、また気楽に、いろいろな観方、楽しみ方ができるよう、我々も工夫していきたいと思っています。鵜飼は、長良川、鵜、鮎、かがり火と、全て自然のなかで自然ともに行うものです。それが鵜飼のいいところです。皆さんの日常の癒し、心の糧にもなれればと思います。そんなことを心に置きながら、これからも皆さんと一緒に長良川の鵜飼を続けていきたいと思っています。

には、どのようなマッチング、「コロナレシヨ」があるのか。ここにも「コロナ禍の新しい方向があるのかも」かもしれません。新しいことをはじめると、様々な声があるもの。根付けば文化。それを見極めながら、今後どういった形にしていくか。一つ一つの試みを、より多くの方々の意見に耳を傾け、その時代、その時に合わせながら改善しチャレンジしていくことが大事なのではないかと思えます。私たちはたとえ来年がどんな状況でも、いつまでもおりにできるだけの準備を行い、鵜飼の技術を守っていくことを続けていきます。そして現状を受け止め、共存しながら、通常の日常が一日も早く戻るように願っています。コロナ禍での新たな形を模索していきたいです。

長良川プロムナード



長良川プロムナードより鵜飼を観覧。
鵜舟が上流から漁をしながらゆっくり下り、かがり火の下で鵜匠が巧みに鵜を操る姿や、6隻が横一列となり鮎を追い込むクライマックスの「総がらみ」など、幻想的な光景、幽玄の世界を楽しみました。

岐阜商工会議所 専務理事 森 健一

新しい鵜飼観覧の楽しみ方でにぎわいを創出。
自慢したくなる風景をつくり
長良川のブランド化を目指します

今回は新型コロナウイルス対策のため、関係者の参加による試行開催といたしました。この実験を踏まえ、岐阜県と岐阜市に観光振興に向けた提言をしていきます。

来年以降はより多くの方に楽しんでいただけるようなにぎわい創出を検討しながら、河畔から見る鵜飼を新たな観光資源に長良川をブランド化し、アピールしていこうと考えています。

川岸にはソーシャルディスタンスを確保するのに十分な空間があります。地元の皆さんが自慢したくなる風景をつくり、日常的に鵜飼を楽しむスタイルが定着することを目指します。

